第50回教育美術・佐武賞　佳作賞

学校から地域そして未来へ

―小学校・第6学年「つながろう～アートを通して広がる世界・広がる生き方～」の実践から―

※前任校長岡市立上組小学校での実践

黒井 美智子（くろい みちこ）　新潟県　見附市立名木野小学校　教諭

〈概要〉

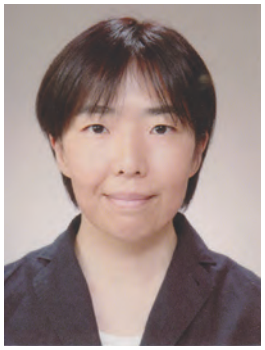
前任校の長岡市立上組小学校では、美術教育を中核に学校運営がなされている。特に、第6学年は「総合的な学習の時間」においても、年間を通じて「子ども学芸員活動」に取り組んでいる。

子どもたちは第6学年までに、地域と連携した活動を多数経験してきている。また、表現及び鑑賞の活動に対して抵抗を見せる子どもは少ない。しかし、ともすると教師主導の活動になり、子どもたち自身が試行錯誤しながらも、活動を進めようとする態度に弱さが見られた。そのため、これまでの経験を生かしながら自信をもって、主体的に関わる態度を育てたいと考えた。

また、準備に追われ、第6学年の取組の詳細が他学年に伝わりにくい、「総合的な学習の時間」の総時数が70時間に削減された、校内に図工専科の職員がいないといった前年度までの課題もあった。今後、誰が担当しても活動を継続していくことができるように、モデルケースとなる年間活動計画のスリム化を心掛けた。

具体的には、同一作品を場所を変えて複数回展示した。また、図画工作はもちろんのこと、国語、さらには学校行事との関連を図ることで、時数を確保した。何より、保護者、地域の方々と連携を図ることで、活動をスムーズに進めることができた。そして、活動を進める中で、子どもたちからも「地域」と「未来」という二つのテーマが浮かび上がり、一つ一つの活動を結び付けていった。

活動の三つの柱である校内美術館「こだま美術館」での企画展、地域での企画展、新潟県立近代美術館での鑑賞活動、それぞれで繰り返し子ども学芸員活動を行う中で、子どもたちは主体的に活動を進め、関わる態度を身に付けることができた。



目次

1　はじめに ～研究の背景と目的～
（1）長岡市立上組小学校について
（2）長岡市立上組小学校において
2　研究の内容と方法
（1）三つの柱
（2）平成25年度に特に配慮すること
3　研究の実際及び考察
（1）オリエンテーション（4月）
（2）「APM秋山孝ポスター美術館長岡」見学（5月）
（3）「出前講座」受講（5月）
（4）「20周年記念コレクション展」鑑賞（7月）
（5）「夏はこの音！あおぞら　江戸風鈴展」（7月）
（6）「秋もこの音！地域に響け　あおぞら　おっここ市　風鈴展」（10月）
（7）「地域に感謝　未来に翔（は）ばたけ　秋山孝ポスター美術展」（10・11月）
（8）「小学生美術館大学」開催（10月）
（9）「開館20周年コレクション展」子ども学芸員活動（1月）
（10）「ありがとうアート～わたしのまち～」（2月）
（11）「ありがとうアート～わたしの学校～」（3月）
4　終わりに ～研究の成果と課題～
（1）より主体的に～学校そして地域から未来へ～
（2）平成26年度の取組

1　はじめに ～研究の背景と目的～

（1）長岡市立上組小学校について

平成23～25年度の3年間勤務した長岡市立上組小学校は、昭和年代から美術教育を中核に学校運営がなされている。グランドデザインにも、育てたい子どもの姿の一つとして「美しいものやよさを感じ取り、自分の思いを表現できるようにする」と明記されている。中越美術教育研究会の事務局も設置されており、美術教育において地域の中心校としての役割を担っている。

特に、平成11年度より開催された「こだま美術館」では、「総合的な学習の時間」の創設とともに、創意工夫を生かした特色ある教育活動が展開されている。第6学年を中心に企画・運営される「こだま美術館」での活動は近年、全国的にも注目を集めている。平成23年度には日本教育公務員弘済会・新潟支部の「特色ある教育実践校・園『優良賞』」、平成26年度には時事通信社の「第29回教育奨励賞『優良賞』」を受賞した。

（2）長岡市立上組小学校において

平成23～25年度に第4～6学年と通称「あおぞら学年」の学級担任を務めた。平成24・25年度には研究主任及び「総合的な学習の時間」主任も務めた。そのため、平成25年度には、第6学年担任・研究主任・「総合的な学

習の時間」主任として、美術教育を中核とした教育活動を進めた。さらに、この3年間は中越美術教育研究会の事務局員も務めた。

子どもたちはこれまで、地域の環境を学び、地域の方々と交流し、地域と連携した活動を多数経験してきた。また、表現及び鑑賞の活動に対して抵抗を見せる子どもが少ない。日常的に様々な材料にふれ、様々な技法を試す経験を重ねることで、関心や意欲が育まれてきたものと考える。伝統的に「こだま美術館」などで鑑賞活動を行う第6学年の子どもたちの姿を見ていることも大きい。しかし、ともすると教師主導の活動になり、子どもたち自身が試行錯誤しながらも、活動を進めようとする態度に弱さが見られた。そのため、これまでの経験を生かしながら自信をもって、主体的に関わる態度を育てたいと考えた。

2　研究の内容と方法

（1）三つの柱

まず、年度当初に各学年で「『総合的な学習の時間』年間活動計画」を作成する。その際、前年度末に振り返った成果と課題を基に見直しを行う。さらに、校内研修として各学年の計画を説明し合い、各学年や教科・領域との関連や系統性などを検討する。第6学年は、平成25年度の年間テーマを「つながろう～アートを通して広がる世界・広がる生き方～」とした。目標は次の2点である。

○プロジェクトの企画・運営を通して、主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てる。

○地域の方々や表現活動に関わる方々、作品などの多くの人やもの、こととのふれあいを通して、それらとつながり、自分の生き方を考えようとする態度を育てる。

活動内容は大きく三つに分かれる。平成25年度は、活動の関わらせ方に特に配慮する。

①「こだま美術館」での企画展及び子ども学芸員活動

校内美術館「こだま美術館」において、企画展及び子ども学芸員活動を行う。どのようなテーマや内容で、どの作家や作品を取り上げるかなど、子どもたちと話し合って決める。役割分担は、第6学年3学級合計94名の子どもが、運営部・開会式部・広報部・学芸部・展示部の中から一人一役を担い活躍できるようにする。館長と副館長、各部のリーダーも決める。特に、学芸部は子ども学芸員を務め、作品の解説や企画展全体の説明を行う。

②地域での企画展及び子ども学芸員活動

学区は比較的広く、駅前商店街や新興住宅地、田園地域など様々な地域が混在している。摂田屋地区には国の登録有形文化財に指定されている歴史的建造物がある。平成21年度には駅前商店街の一角に「ＡＰＭ秋山孝ポスター美術館長岡」が開館した。多摩美術大学教授でもある秋山孝先生が卒業生ということで、平成12年度に「こだま美術館」で企画展が開催され、近年では美術館やその周辺で企画展を行うことが多くなった。平成25年度は年間を通じて地域の美術館と連携を図って活動する。また、駅前商店街の活性化を図ろうと、地域で行われる「おっここ市」に合わせて、これも近年、企画展を行っている。平成25年度はこれまでの地域との関わりを生かし、駅前商店街はもとより美術館、さらには摂田屋地区にまで規模を広げ、地域での企画展を開催する。

③新潟県立近代美術館での鑑賞活動及び子ども学芸員活動

市内にある新潟県立近代美術館の「出前講座」として、学芸員の方から来校していただき、鑑賞について学ぶ。子どもたちはスライドを介して対話型鑑賞を体験する。その後、校外学習で新潟県立近代美術館を見学し、美術館という場で本物の作品を前に、学芸員の方々と対話型鑑賞を体験する。さらに、新潟県立近代美術館において、子ども学芸員活動を行う。こうした活動も近年続けて行われていたが、平成25年度に新潟県立近代美術館は開館20周年を迎える。その節目に二度に渡り、コレクション展を鑑賞する。特に、「開館20周年コレクション展」は県内関係作家の作品が多く展示されているため、子ども学芸員活動の集大成の場にふさわしいと考える。

（2）平成25年度に特に配慮すること

①子ども主体の活動を

前年度までの成果と課題を踏まえた上で、「あおぞら学年」として、どのような活動を行っていくか。計画する際には、何よりも子ども主体の活動になるように考える。子どもたちの発言や学習プリントに書かれた意見を可能な限り取り入れるように心掛ける。一つの活動が終わる度に、「改めて行ってみたいこと」を問い掛け、次の活動に反映させる。

②より広い連携と発信を

ともすると準備に追われ、第6学年の取組の詳細が他学年に伝わりにくいという前年度までの課題があった。そこで、他学年の子どもや保護者、職員に向けて、活動ごとにポスターやチラシ、放送で取組を知らせるように心掛ける。地域に向けても、ポスターやチラシを回覧する。そのためには、早めに計画的に活動を進めることが不可欠となる。

③スリム化及び時数の確保を

「総合的な学習の時間」の総時数が70時間に削減された。また、校内に図工専科の職員はいない。今後、誰が担当しても活動を継続していくことができるように、モデルケースとなる年間活動計画のスリム化を心掛ける。具体的には、同一作品を場所を変えて複数回展示する。また、他教科・領域、さらには学校行事との関連を図ることで、時数を確保する。

平成25年度　総合的な学習の時間　年間活動計画（案）　　6学年　長岡市立上組小学校

年間テーマ	つながろう～アートを通して広がる世界・広がる生き方～	総時数	70時間
目標	○ プロジェクトの企画・運営を通して，主体的，創造的，協同的に取り組む態度を育てる。 ○ 地域の方々や表現活動に関わる方々，作品などの多くの人やもの，こととのふれあいを通して，それらとつながり，自分の生き方を考えようとする態度を育てる。	身に付けたい力	
	【対象・活動への関心・意欲・態度】	・友達とアイディアを出し合いながら，主体的，創造的，協同的にプロジェクトを企画・運営しようとする態度。 ・地域の方々や表現活動に関わる方々，作品などを大切にしながら活動を進める中で，自分の生き方を考えようとする態度。	
	【総合的な思考・判断，知識・理解】	・プロジェクトの企画・運営，地域の方々や表現活動に関わる方々とふれあう活動を通して，作品や作家の思いを感じ取ったり，自分の生き方について考えたりする力。	
	【問題を解決する力】	・それぞれのプロジェクトで課題を見付け，それらを主体的に解決しようとする力。	
	【表現する力】	・友達，地域の方々や表現活動に関わる方々，作品など，自分から多くの人やもの，ことと関わる力。 ・作品を鑑賞して感じたことや伝えたい地域の魅力，活動に対する思いなどを表現する力。	

実施月（時数）	4（3）	5（6）	6（8）	7・8（8）	9（8）	10（10）	11（8）	12（6）	1（6）	2（5）	（2）
具体的なプラン	第Ⅰ期（43時間）						第Ⅱ期（27時間）				
活動内容	オリエンテーション	県立近代美術館・出前講座	国立西洋美術館 江戸風鈴制作 看板チェック キッザニア東京	企画展①準備 こだま美術館企画展①（風鈴または家） 県立近代美術館常設展鑑賞（開館20周年記念コレクション展）	企画展②準備	こだま美術館企画展②（作家または看板）	県立近代美術館作品調べ	県立近代美術館学芸員準備	県立近代美術館（開館二十周年記念コレクション展）	活動のまとめ準備	活動発表会
	秋山孝ポスター美術館見学	ぼくのわたしの夢の家	東京スケッチ	芸術祭作品製作		おっここ市	こだままちかど美アートフェスタ準備	こだままちかど美アートフェスタ			
		地域を歩く（作家または人生の達人探し・地域スケッチ）・芸術祭作品製作			おっここ市準備						
☆★情報の収集の方法	☆イメージマップ	★美術館見学　★取材・インタビュー　★インターネット　★図書資料 ☆鑑賞カード　☆活動記録カード　☆振り返りカード								☆活動記録カード ☆振り返りカード	
主な支援者	秋山孝ポスター美術館学芸員 県立近代美術館学芸員 高田建築の方々 宮内商店街の方々 地域の方々		国立西洋美術館学芸員	秋山孝ポスター美術館学芸員 県立近代美術館学芸員 高田建築の方々 宮内商店街の方々 地域の方々					県立近代美術館学芸員		
他教科との関連	図「伝え合って」	国「卒業レポートを書こう」	国「推薦します。人生の達人」 図「表し方をくふうして」	国「表し方をくふうして」 ◎統計グラフコンクール	国「インターネット・コミュニケーション」	国「メディアリテラシー入門」 国「パネルディスカッションをしよう」		図「版を生かして」	国「学校にありがとう」 図「版を生かして」	国「卒業レポートを書こう」	家「成長したわたしたち」 道「卒業まで五十日」
評価規準	【関心】【思考】【表現】	【関心】【思考】【解決】【表現】								【関心】【解決】	【思考】【表現】

3　研究の実際及び考察

＊こ：こだま美術館／地：地域
新：新潟県立近代美術館

（1）オリエンテーション（4月）

平成25年4月。学年合同オリエンテーションを行い、前年度の計画を基に、特に行ってみたいことを話し合った。子どもたちからは、次のような意見が出された。

○子ども学芸員活動・○○アート・工作・ポスター・鑑賞活動・図工作品を校内に飾る・一人一人で作文を書いたり工作をしたりして、地域と協力してアートを完成させるなど。

前年度までの活動に似た意見がほとんどであった。子どもたちの間に活動が浸透していると言えるが、「あおぞら学年」としての独自性をどう打ち出すかが早くも課題となった。

「ＡＰＭ秋山孝ポスター美術館長岡」（含：高田建築事務所）と新潟県立近代美術館、駅前商店街とも、どんな活動が可能であるか、年度始休業中に打ち合わせを行っていた。それぞれ、できるだけ子どもたちの意見を尊重したいとのお言葉をいただいた。子どもたちの意見と打ち合わせ内容を反映させ、4月中には計画をほぼ完成させた。

（2）「ＡＰＭ秋山孝ポスター美術館長岡」見学（5月―地①）

早速、学年合同で美術館を見学する校外学習を行った。存在は知っていたものの初めて訪れた子どもが多く、美術館に足を踏み入れ、その静謐な空間に息を呑んだ。同時期に「秋山孝が選んだ30の金言・高田清太郎の建築デザイン哲学展」が開催されていた。当日は、学区にある高田建築事務所の社長・高田清太郎氏から直接お話を伺うこともできた。

見学後、「改めて、行ってみたいこと」を問い掛けたところ、「秋山孝先生の作品を見てみたい」「できれば、直接お会いして、お話を伺いたい」「ポスターをつくってみたい」といった意見が出された。そこで、こうした意見を校内の芸術祭に合わせて開催する「こだま美術館」での企画展Ⅱにつなげたいと考えた。

（3）「出前講座」受講（5月―新①）

新潟県立近代美術館の学芸員の方を講師にお招きし、「出前講座」を行っていただいた。「出前講座」を行うにあたり、前年度同様、講話ではなく子どもたちとやりとりをしながら一つ一つの作品にじっくり取り組んで進めたいとのお話をいただいた。それこそが対話型鑑賞の要となる。さらに、学芸員の仕事内容のお話もしていただけるとのことであった。

当日、お話の中で学芸員とはどんな仕事かを子どもたちに尋ねられた。子どもからは「絵の紹介」といった意見が出されたが、それを受けて「美術と人をつなぐ仕事」と話されていた。美術品を守るための仕事内容についてもお話いただいた。何よりスライドを介した対話型鑑賞において、子どもたちから意見を引き出し、どんな考えも受け止めることで、一緒によく見て、考えて、楽しむことを体験させてくださった。

（4）「20周年記念コレクション展」鑑賞（7月―新②）

ついに、校外学習で新潟県立近代美術館を訪れ、「20周年記念コレクション展」を鑑賞した。お二人の学芸員から対話型鑑賞を行っていただいた。時期を調整し、初めての「こだま美術館」での企画展Ⅰ及び子ども学芸員活動目前に対話型鑑賞を行うことができるようにした。何度か対話型鑑賞を体験してきたことで、子どもたちからは次々と意見が出された。「なるほどね」「そんなふうにも見えるんだね」と子ども同士が対話していた。

（5）「夏はこの音！あおぞら　江戸風鈴展」（7月―こ①）

「あおぞら学年」が初めて「こだま美術館」で校内企画展Ⅰを開催し、子ども学芸員活動を行う。これまでの活動を踏まえつつ、より

広い連携と時数の確保を両立するために、どのようなテーマや内容にするか。拠り所はやはり、子どもたちの意見であった。辿り着いたのは、6月の宿泊体験教室で製作した江戸風鈴を展示するという内容であった。子どもたち一人一人がガラスを吹き、思い出深い学校や大切なふるさとにまつわる絵を描いて、世界で一つだけの風鈴を完成させていた。企画展Ⅰの名前は、子どもたちから候補を募り、学年全体で決めた。こだま美術館・第30回企画展は、「夏はこの音！あおぞら　江戸風鈴展」となった。

また、高田建築事務所に相談したところ、風鈴を木の実に見立てて展示するための木を廃材でつくってくださることになった。学級1本ずつ、風鈴の木を依頼した。各部での準備も進められ、運営部は受付の練習を行った。展示部は作品がガラス製ということで、安全面への配慮を確認した。広報部はチラシを作成し、全校の保護者や職員向けに印刷・配布した。学芸部は一人一人が子ども学芸員として説明する内容を原稿にまとめた。さらに、お互いに質問し合い練習を行った。その時々で、鑑賞者に対応しなければならないことも再度確認し合った。

【写真1】 活動する子ども学芸員

【写真2】 風鈴が木の実のように

開催初日。開会式部担当が司会進行し、子ども館長があいさつを述べ、テープカットを行った。開会式直後の休み時間には、受付に行列ができるほど、他学年の子どもや職員が来館した。子ども学芸員は緊張しつつも、自分の風鈴を示しながら、何が描かれているかを説明したり、なぜ大きさが一つ一つ違うのかといった質問に答えたりした。さらに、低学年から大人まで幅広い客層に合わせて、時には目線を合わせようと身をかがめて活動していた。館内が混雑し始めると、展示部が優しく声を掛けていた。手応えをつかんだ子どもたちは、来館が少ない学年があることに気付くと、自主的にPRするようになった。

なお、期間は個別懇談の時期に合わせた。全校の保護者が来校する機会に合わせることで、多くの来館者を無理なく募ることができると考えた。送風機で風鈴が鳴るようにしておいたのだが、「児童玄関を入るとすぐに風鈴の音が聞こえ、会場まで足を運んだ」という保護者の声が複数届いた。果たして、期間中に800名以上の来館者を数えた。

(6)「秋もこの音！地域に響け　あおぞら　おっここ市　風鈴展」（10月―地②）

平成25年度は、風鈴及び風鈴の木を駅前―商店街―「APM秋山孝ポスター美術館長岡」―「おっここ市」の各会場に展示した。駅前商店街に近い会場、「おっここ市」の中心会場、上組小学校に近い会場の3か所に、風鈴の木を設置した。駅前商店街では、雁木10か所にも風鈴を吊していただいた。企画展の実現のためには、関係各位の了承が不可欠となる。企画書を作成し、町内会長や商店街、「おっここ市」の関係者に打診したところ、それぞれが子どもたちのためならと快諾してくださった。また、一日限りとはいえ、土曜日開催となるため、保護者の了承と協力なしでは実現しない。所用のため参加できない子どももいたが、60名以上の参加があった。保護者には可能な限り、搬出入に協力していただいた。

地域での企画展は初めてであり、「おっここ

こ市」を目指していらした方や道行く方にも声を掛けなければならない。緊張感が子どもたちに漂っていた。それでも、勇気を出して声を掛けたところ、足を止めて説明を聞いてくださる方が現れた。風鈴には校内企画展Ⅰとの違いを出すために、学校や地域に関する俳句を書いた短冊を吊しておいた。子どもたち自身が作者であったため、突然問われたことに対しても、自分なりに答えることができた。何度かそうした対話を繰り返す内に、子どもたちの緊張も解け、何十メートル先まで響くほど大きな声で呼び掛けをするようになった。

【写真３】 当日の子ども学芸員活動の様子

（7）「地域に感謝　未来に翔（は）ばたけ　秋山孝ポスター美術展」（10・11月―こ②）

校内の芸術祭では絵と工作の作品展示、生活科と「総合的な学習の時間」の取組の紹介を行う。さらに、第６学年は「こだま美術館」で企画展Ⅱも行う。１年間で最も多くの来館者が見込める貴重な機会である。ちなみに、第６学年は図工「わたしの学校・わたしのまち～表し方を工夫して～」の学習で、６年間過ごした校舎や通い続けた通学路など、心に残る場所や場面を絵に表した。さらに、国語と関連させ、「随筆を書こう～わたしの学校・わたしのまち～」の学習では、学校や地域について随筆を書き、子どもたちの関心を高め、発想や構想を広げられるようにと考えた。

「秋山孝先生のポスターを、もっと他のものも見てみたい」「秋山孝先生の他のポスター展をしたい」など、子どもたちの秋山孝先生とポスターへの関心が高まり、芸術祭での校内企画展Ⅱで取り上げさせていただけるか打診したところ、快諾をいただき、さらには可能であれば子どもたちと直接お会いしていただけるとのお話があった。子どもたちにも快諾いただいた旨を伝え、まずは「ＡＰＭ秋山孝ポスター美術館長岡」でこれまで行われてきた企画展などを参考に、テーマを考えた。半年間の取組を振り返ると、子どもたちからもやはり「地域」という言葉が出てきた。また、卒業まで後半年となり、「未来」をキーワードに取り上げることにもなった。こだま美術館・第31回企画展の名前は「地域に感謝　未来に翔（は）ばたけ　秋山孝ポスター美術展」に決まった。「ＡＰＭ秋山孝ポスター美術館長岡」の方々に「こだま美術館」に足を運んでいただき、どの作品を何点展示するのかを話し合った。学区の様子を描いた作品や「過去―現在―未来」を考えさせられる作品と、何点かはぜひ取り上げたい旨を伝えた。最終的に、「地域」関係、「未来」関係、各７点・合計14点のポスターを展示することになった。

【写真４】 軒先で揺れる風鈴

役割分担については、子どもたちの希望を尊重した。企画展Ⅰと異なる部を希望した子どももいたが、学芸部を含めて、前回と同じ部を希望した子どももいた。そこで、前回の体験を踏まえて、アドバイスし合いながら活動を進めるように促した。子ども学芸員は、自分が担当したい作品を１点決めるようにした。そして、子ども学芸員として説明する内容を原稿にまとめる際に、あえて図録や解説文を見せずに考えさせ、子どもから質問があった時のみに参考にするようにした。何よりも、子ども自身が「この作品を担当したい」と願った思いを一番伝えてほしいと考えたからである。それでも驚くべきことに、子ども

たちが書いた内容が、図録や解説文に書かれている内容と重なる点も多かった。さらに、完成した原稿を抜粋してキャプションを作成し、会場に展示するようにもした。キャプションの一部を次に紹介する。

○（前略）秋山孝先生は、この地域の宝物だから、みなさんに伝えたくて描かれたのだと、僕は思います。そして、これが地域とつながるということだと思います。

○私はこのポスターを見て、この花火に込められた想いが、「もう戦争がない世の中にしよう」で、真ん中の笑顔は「この世から戦争がなくなって、みんな笑顔に」という意味だと思いました。また、縄文土器は、まさにこの長岡を表しているように、私には思えました。

○この作品は、骨半分と鳥半分が混ざっていて、空を飛んでいます。首まで骨になっています。また、右上に「HELP」と描いてあります。酸性雨のために、未来は危険だということを表していると、僕は思います。

【写真5】校内の芸術祭当日の子ども学芸員活動

芸術祭当日の「親子鑑賞タイム」には、ご家族や地域の方々も多数来館された。各部の子どもたちは、企画展Ⅰでの経験を基に活動を進めていた。しかし、子ども学芸員活動では課題も浮き彫りになった。それまでは、自分自身が作者であったことから、突然の質問にも答えることができていた。しかし、秋山孝先生の作品について質問を受けると、答えに窮してしまったり、質問と噛み合わなかったりする場面が見られたのである。事前の調べ活動を充実させる必要があった。

それでも、子どもたちの活動に感心の声が寄せられることが多かった。合計来館者数は1000名を超え、近年稀に見る盛況となった。一つの作品に対して、説明する子ども学芸員が毎回異なることを知ると、何度も見に来て子ども学芸員の解説に耳を傾けてくださる方が多くいらっしゃった。来年度を見据えて来館する、第5学年の子どもたちも多かった。

【写真6】「こだま美術館」会場の様子

（8）「小学生美術館大学」開催（10月―地③）

「こだま美術館」での企画展Ⅱの初日に、秋山孝先生の発案で「小学生美術館大学」を開催することになった。「APM秋山孝ポスター美術館長岡」を会場に、秋山孝先生と直接語り合った。スライドを介して、企画展Ⅱで展示する14点について、秋山孝先生は子どもたちの声を積極的に取り上げてくださった。子どもたちは最初、作品に対する秋山孝先生の考えを尋ねようと質問した。秋山孝先生は必ず、子どもたち自身の考えを問い返され、子どもたちと対話をしようとなさった。担当もこの企画展や「総合的な学習の時間」での取組のねらいについて尋ねられ、自分自身の思いを語ることの大切さを痛感した。

（9）「開館20周年コレクション展」子ども学芸員活動（1月―新③）

これも前年度までと同様の活動であるが、どの展覧会で子ども学芸員活動を行うか、新潟県立近代美術館の学芸員の方と何度も話し合った。最終的には、「秋山孝先生以外にも、

長岡市や新潟県にはどんな画家がいるのかを調べてみたい」「絵だけでなく、立体のアートも見てみたい」といった子どもたちの意見を反映させた。同時に、保護者にも送迎など参加協力を呼び掛けた。平日よりも保護者・ご家族の方々の来館者が見込めると、土曜日に活動することにしたためである。約60名の参加があり、例年の倍以上となった。

そして、作品紹介のための事前学習を行った。これまで学芸部に所属していなかった子どもが学芸員活動に参加できるようにと、学芸部には当日の参加者が所属し、広報部には当日の不参加者が所属することとした。学芸部の子どもは「こだま美術館」での企画展Ⅱ同様、自分が担当したい作品を1点決めるようにした。取り上げられている作品や作家について資料を基に調べ、原稿をまとめた。しかし、ここで年間を通して最も大きな課題に直面する。取り上げる作品や作家、そして、参加者数が激増したために、肝心の事前学習が表面的なものにとどまっていたのである。子どもたちは「どう思われますか?」と、対話型鑑賞を意識したセリフを入れて原稿をまとめていた。けれど、自分はなぜその作品を選んだのか、なぜそのように見えると思うのか、対話する鑑賞者に訴え掛ける自分の思いを欠いていた。担当の猛省に尽きるが、今一度、伝えるべきことを見直すようにした。その際に、学習プリントには次のように記しておいた。

「『伝えたい!』という気持ちを大切にして、『子ども学芸員』活動に臨もう」

○考える…なぜ、その作品を選んだのか。
　どうして、そう思ったのか。
○見る　…気付いたこと（形・色・思いなど）
○調べる…分かったこと
　（資料・本・インターネットなど）

子どもたちは、当日直前まで、自分が選んだ作品を見直し、原稿の修正を行った。以前のように質問を受けて答えに窮してしまわないか、美術館という場で緊張感に負けずに自分の思いを伝えることができるかという不安を抱きつつも、子どもたちを見守った。すると、子どもたちは、これまでのどの活動よりも、自分の思いを語り出したのである。学芸員の方々の助言により、もはや原稿に形式的なやりとりのセリフは入れていなかった。それでも、子どもたちは思いを語り、時には鑑賞者の思いを聞き出し、「なるほど、そんな見方もできますね」と、その時々で言葉を交わしていた。子ども学芸員の一人は、次のように解説していた。

○（前略）この絵を見た時に、私はたくさんの色を重ねていて、美しいと思いました。この絵が様々な色を重ねているのは、モデルから感じ取ったものや、これまで重ねてきた人生を色に表しているからだと私は思います。また、この絵をよく見ると、色だけではなく、実は様々な物が描かれています。

(10)「ありがとうアート～わたしのまち～」
（2月―地④）

地域での企画展の集大成として何ができるかを考え、「ありがとうアート～わたしのまち～」を開催することとした。「ＡＰＭ秋山孝ポスター美術館長岡」において、関連する作品を展示していただいた。校内の芸術祭で展示した作品の中から、地域を描いた作品52点を「わたしのまち～表し方をくふうして～」として展示した。また、かつての「風鈴の木」を「感謝の木～ありがとうアート～」とし、地域への感謝のメッセージを書いた短冊を添えて館内に飾った。すでに校内の芸術祭で展示された子どもたちの作品であったが、「ＡＰＭ秋山孝ポスター美術館長岡」の方々が、1点1点丁寧に額装して展示してくださったおかげで、見応えのあるものになった。子どもたちも保護者、ご家族の方々も、細部まで熱心に見入っていた。

(11)「ありがとうアート～わたしの学校～」
（3月）

平成26年3月。ついに卒業の日を迎えた。卒業証書授与式の会場となる体育館には、前日準備の際に第5学年の子どもたちに協力してもらい、「わたしの学校～表し方を工夫して～」で学校を描いた42点を展示しておいた。

【写真7】「ありがとうアート～わたしのまち～」

そして、ここにも感謝の木を展示した。「ありがとうアートⅠ」で地域への感謝のメッセージを書いた短冊が、実は両面になっており、もう一方には学校への感謝のメッセージを書いておいたのである。

4　終わりに～研究の成果と課題～

(1) より主体的に
～学校そして地域から未来へ～

活動の三つの柱である、①「こだま美術館」での企画展②地域での企画展③新潟県立近代美術館での鑑賞活動、それぞれで繰り返し子ども学芸員活動を行う中で、子どもたちは主体的に取り組む態度を身に付けていった。活動ごとに、アンケートや時にはお礼状に対する返事の手紙が届くなど周囲から反響があり、自信をもって活動を進めることができるようになっていった。そして、何よりも相手と思いを伝え合う楽しさを体験を通して学ぶことができた。学校や地域、作品や関わる人々に対して抱いた思いを、今後も大切にしてほしい。課題に直面した時にも試行錯誤し乗り越えた経験を生かしていってほしいと願っている。

また、平成25年度末に学校評価を行った。「新聞やポスター、レポートなどで自分の学びを紹介・発表することができる子どもの増加」という評価項目に関わって、全校の子どもを対象としたアンケートで、前期74％から後期82％に肯定的評価が向上した。

【写真8】「ありがとうアート～わたしの学校～」

(2) 平成26年度の取組

①長岡市立上組小学校において

平成26年度も第6学年が子ども学芸員活動を行っていた。「こだま美術館」での企画展Ⅱや「おっここ市」での企画展と可能な限りで実際に鑑賞したり、様子を聞いたりした。すると、平成26年度の担当から、前年度の活動を基に進めているとの話があった。配慮したことが次に引き継がれていることを実感することができた。

②見附市立名木野小学校において

現任校である見附市立名木野小学校において、校内の文化祭に向けて全校の子どもと職員の参加を募り、テーマパネルを作製した。伝統となっている「草薙龍」の鱗を模したメッセージカードに学校のよいところを一人一人が書いて、パネルに貼るようにした。地域の特性を生かし、多くとつながりふれあう活動に、これからも取り組み続けていきたい。

【写真9】 文化祭のテーマパネル